

## ■ 編集だより

### 編集後記

編集委員会では本誌の編集方針について繰り返し議論を行い、数年に1度会員へのアンケートを実施している。本年5月号の巻頭色紙で通算3回目のアンケートを行った。有効回答数は611で3.97%と回答率が低かったが、寄せられた意見から熱心に学会誌を読んでいる会員の回答であることがわかる内容であった。学会誌のあるべき姿を検討するにあたって重視すべきアンケート結果と考えている。回答者の経験年数、勤務などの属性はほぼ会員の構成比率に近似していた。

よく目を通す雑誌のベスト3は日本語雑誌は精神神経学雑誌、精神科治療学、精神医学の順であったが、精神医学と4位の臨床精神医学は僅差であった。本誌でよく読むジャンル（複数回答）では、巻頭言（51%）、総説（50%）、教育講演（40%）、特集（39%）、原著（36%）、症例報告（35%）、臨床報告（34%）の順であった。これを反映して今後どのような記事を充実すべきかについては、特集企画（45%）、教育的記事（44%）、原著・臨床報告（32%）、症例報告（25%）であった。

学会誌に執筆したことがある会員は20%で80%は執筆したことがなかった。熱心な読者でも投稿をされたことがないことを考えると、投稿の促進を図る必要があることが改めてわかった。投稿論文の審査基準については、妥当とする意見が30%、厳しすぎる7%であるが、わからないとの意見が60%にのぼり、現在の編集委員会が良い素材の論文であれば修正を促し掲載にむけて執筆者と努力していることが十分に伝わっていないことがわかった。投稿を促進する手立てとして、地方会の発表者への投稿を勧める（46%）、専門医ポイントを筆頭著者だけでなく著者全員に与える（31%）、論文作成のための講習会を開催する（24%）であった。学術総会、地方会の発表で優秀な発表には現在も投稿を促しているが、より組織的に行うことが求められている。論文作成のための講習を行えば編集方針、審査基準等を理解していただける機会になり、専門医として論文を執筆する技術向上とともに論文を評価する力量が養われるので、編集委員会と生涯教育委員会と共同で行うことを検討していく必要がある。

本誌のサイズを、現在のB5判から、大きな文字などで見やすい誌面となるA4判にしてはどうかとの提案は賛成（21%）、反対（33%）、どちらでも良い（45%）と積極的意見は少なかった。本誌が学会ホームページ（会員専用ページ）上でほぼ全文読むことができるようになってきていることから、希望する会員のみ紙雑誌を郵送することについて、賛成（49%）、反対（25%）、どちらでもよい（25%）と電子ジャーナルに賛成が多数であった。意外にも経験年数5年未満では賛成が33%であったのに対して、6～10年（57%）、11～20年（55%）、20年以上（46%）と精神科医としての経験がある会員は電子ジャーナルへの抵抗感が少ないことが判明した。もちろん、紙雑誌を希望する会員は尊重していく方針であるが、現在のPDF版から読みやすく便利な電子雑誌の準備を進めていくことが確認された。

そのほかに、雑誌への熱意ある貴重な自由意見を多数いただいた。すべての意見を編集委員全員が共有化した上での討議を行っている。アンケート結果を尊重し、会員の方々の執筆、投稿が盛んになることによって、当学会誌が精神医学、精神科臨床の発展の場になっていくよう編集委員会も努力していくことを確認した。

細田 眞司